

横浜国立大学教育学部の学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」

における2020年度学生の事後調査結果の報告

教職部会 スクールデー実践担当
杉山 久仁子

1. はじめに

「スクールデー実践A・B・C」は、2018年度に学部教育科目における専門科目の中の「学校インターンシップ科目」として開設された。この科目は選択必修科目であり、学生は2年次にA・B・Cのいずれかの単位を取得しなければならない。この科目では、1年次の「教育実地研究」の学びを受け、3年次の「教育実習」へつなぐ役割が期待されている。

「スクールデー実践A・B・C」の実施までの経緯や各科目の内容、2018年度と2019年度の事後調査結果については、鬼藤・高芝(2021)によって報告されている。2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で全授業が遠隔で行われることになったために、授業の実施方法は大幅に変更になった。本稿では、2020年度における「スクールデー実践A・B・C」の実施内容と事後調査結果について、これまでの結果と比較しながら報告する。

2. 「スクールデー実践A・B・C」の実施内容

2020年度は、春学期の授業開始が1か月延期され、開講する授業は全て授業支援システムを活用した遠隔による方法で開講することになった。当時は、秋学期に対面授業の再開を期待し、遠隔授業が難しく、対面での指導が必要な授業については秋学期に移して実施することにした。教育実習(小学校)も秋学期に延期となり、他の学校インターンシップ活動も遠隔での実施か、秋学期に延期するかを担当者が判断することになった。スクールデー実践A(教材研究)の3専門領域(社会、数学、音楽)とスクールデー実践B(初等教育フィールドワーク研究、春学期分)が春学期に実施された。その後、8月になっても感染症の状況は改善されなかったことから、秋学期も遠隔授業になり、教育実習以外の学外での活動は、原則中止となった。そのため、スクールデー実践Aの11専門領域とスクールデー実践B(秋学期分)、スク

ールデー実践C(アシスタントティーチャー、春学期分と秋学期分)も全て遠隔で実施することになった。

スクールデー実践の実施は、これまでと同様にAは専門領域、BとCは教職カリキュラム委員会(現教職部会)が担当した。春学期のスクールデー実践Bは、6名のスーパーバイザー(SV、横浜市立小学校の元校長)と大学教員2名で授業動画を活用して行った。学生は6つの班に分かれ、最初に講義と授業動画を視聴し、その後班で討議をし、その結果を全体で発表し共有した。秋学期は、BとCは合同(約120名)で実施することとし、11名のSVと大学教員4名で担当した。内容は、春学期のスクールデー実践Bで実施した内容を一部変更し、11班で行った。本来、スクールデー実践A・B・Cの活動内容は異なっており、学生は内容を確認した上で1年次の最後に選択していたが、2020年度についてはスクールデー実践BとCは、同じ内容で実施されたことになる。

3. 学生の事後調査の実施

3.1. 対象と方法

調査対象は、横浜国立大学教育学部学校教育課程に在籍する2年生である。これまでの「スクールデー実践A・B・C」の事後調査の回答者数を表1に示す。

事後調査は、2018年度、2019年度は各学期の最終週(春学期は7月、秋学期は1月)に実施された全体報告

表1 スクールデー実践A・B・Cの回答者数

	年度	2018	2019	2020
スクールデー実践A	人数	116	98	77
	割合	49.8%	43.2%	44.8%
スクールデー実践B	人数	46	17	24
	割合	19.7%	7.5%	14.0%
スクールデー実践C	人数	71	112	71
	割合	30.5%	49.3%	41.3%
合計人数		233	227	172

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2020年度学生の事後調査結果報告

会終了時に質問紙を配布・回収することで行われた。しかし、2020年度は感染予防のために全体報告会は実施することができず、授業支援システムを通じて2021年2月にMicrosoft Formsを使って事後調査を実施した。そのため、2020年度も2年生は約240名受講していたが、事後調査の回答者数は172名と約7割の回収率となってしまった。科目別の回収率は、Aは76%、Bは69%、Cは66%で大きな差はなかった。なお、自由記述以外の項目の回答率は2020年度は100%である。

事後調査の内容は、過去との比較のため同じとし、選択肢で回答する20項目と全体報告会（今回は学期末の科目ごとの報告会）について自由記述で回答する1項目で構成される。質問項目の内容、選択肢については表2～21に示す。自由記述の結果はここでは割愛する。

3.2. 集計結果

3.2.1. 子どもと関わるボランティア経験の有無

子どもと関わるボランティアの経験がある学生の人数と割合を表2に示す。選択肢は「あり」と「なし」であり、「あり」を回答した人数を示した。

表2から、「学生ボランティアの学習支援の経験」と「宿泊体験学習補助の経験」の割合は2018年度から2019年度にかけて増えていたが、2020年度では少し減少した。一方、「わくわくサタデーやがやっこ探検隊の経験」の割合は、2018年度から2019年度にかけてやや減少していたが、2020年度は2018年度とほぼ同じ割合になっている。「上記以外の、子どもと関わったボランティアの経験」の割合は、2018年度から2019年度で増え、2020年度はほぼ同じ割合が維持されていた。

2020年度はわくわくサタデーやがやっこ探検隊の活動も遠隔で一部録画した動画を配信して実施されたこと、学校におけるボランティアは学校側からの要請がなければ実施できなかったことから、2020年度に子どもと直接関わる経験はほぼ1年次のみ活動と考えられ、2019年度の学生に比べると子どもと関わるボランティアの機会は減ったのではないかと考えられた。

3.2.2. 教職志望度合

スクールデー実践受講後の学生の教職志望度合を表3に示す。これ以降は、2018年度と2019年度のデータの掲載は省略するので適宜既報のデータを確認してほしい。

表3から、学生の教職志望度合について、2020年度の学生合計では「1.とてもそう思う」は36.0%、「2.ややそう思う」が26.7%であり、合計すると62.7%で6割以

表2 子どもと関わるボランティアの経験がある学生の人数と割合

	年度	2018	2019	2020
学生ボランティアの学習支援の経験について	A	15	20	23
		12.9%	20.4%	29.9%
	B	24	7	7
		52.2%	41.2%	29.2%
	C	24	63	28
		33.8%	56.3%	39.4%
合計	63	90	58	
		27.0%	39.6%	33.7%
宿泊体験学習補助の経験について	A	18	26	16
		15.5%	26.5%	20.8%
	B	21	10	7
		45.7%	58.8%	29.2%
	C	19	36	18
		26.8%	32.1%	25.4%
合計	58	72	41	
		24.9%	31.7%	23.8%
わくわくサタデーor がやっこ探検隊の経験について	A	12	14	9
		10.3%	14.3%	11.7%
	B	15	3	11
		32.6%	17.6%	45.8%
	C	15	19	12
		21.1%	17.0%	16.9%
合計	42	36	32	
		18.0%	15.9%	18.6%
上記以外の、子どもと関わったボランティアの経験について	A	30	39	34
		25.9%	39.8%	44.2%
	B	19	12	11
		41.3%	70.6%	45.8%
	C	20	52	33
		28.2%	46.4%	46.5%
合計	69	103	78	
		29.6%	45.4%	45.3%

※ 各年度のA、B、Cの人数は表1を参照

上の学生が教職を志望していた。これは、2019年度の67.8%と比べると約5%減少しているが、2018年度の57.1%よりも約6%増加している。A・B・Cを個別に見ると、Aは50.7%、Bは87.5%、Cは67.6%となっており、教職を志望する割合がB>C>Aという傾向は、2018年度から変わっていない。2019年度と比較すると、Aは5.4%減少、Bはほぼ同じ、Cは7.4%減少していた。

一方、「4.あまりそう思わない」は16.9%、「5.全くそう思わない」が9.9%であり、合計すると26.8%で3割弱の学生が教職を志望していなかった。2018年度の

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2020年度学生の事後調査結果報告

18.0%、2019年度の15.9%と比べると増えている。A・B・Cを個別に見ると、Aは37.7%、Bは8.4%、Cは21.1%となっていた。特にAとCについては、2018年度の29.3%と8.4%、2019年度の21.4%と12.5%に比べて増えている。

Aについては、従来から大学構内で教材理解・教材開発に取り組むことを中心としていることから、学外での活動ができなくなったことの影響は小さいと考えられるが、対面での授業が遠隔になったことで個々に課題に取り組むことになり、教材理解・教材開発の面白さを感じにくかったのではないかと推察される。Cについては、従来は個人で神奈川県下の小中学校に出向いて学習支援に取り組んでいたが、遠隔での実施に変更されたことで落胆し授業への意欲が下がっている学生がいたように感じられた。Bの学生も小学校での活動ができなかったことはCと変わらないが、SVからの指導を受けることは予定通りできたことから、教職への志望を維持することができたのではないかと考えられる。

次に、学生が教員就職で希望する学校種を表4に示す。学生合計では、「1.小学校」を希望する学生が最も多く34.3%、次いで「2.中学校」の26.2%、「3.高校」の21.5%

であった。小学校は2018年度と同じ割合で、2019年度の41.4%よりも減少しており、中学校が2018年度の14.2%、2019年度の22.9%よりも増えており、「3.高校」と「4.特別支援学校」は2018年度から少しずつ減少している。A・B・Cを個別に見ると、Aの学生の希望学校種は小学校>高校>中学校で、2019年度と傾向は同じであるが、高校を志望する割合が顕著に減少していた。Bでは、2018年度と2019年度は小学校を希望する学生が多かった(78.3%、52.9%)が、2020年度は小学校33.3%、中学校37.5%でほぼ等しかった。また、2020年度は高校を希望する割合が増えていた。Cは、傾向はBと似ており、最も多かった小学校希望の割合が減り、小学校29.6%、中学校33.8%でほぼ等しくなっていた。

一方、「6.教員志望ではない」が学生全体で2020年度は12.8%と2018年度8.2%、2019年度4.0%よりも増えている。これは、表3で教職を志望しない学生が増えていた結果と合致している。2020年度は回収率が約7割であること、2018年度と2019年度は質問項目によって回答率が7割~9割であることなどから、単純に結果を比較することはできないが、2020年度の学生の今後の教職志望の変化に注目をしたい。

表3 スクールデー実践A・B・Cの事後調査における学生の教職志望度合
 (「大学卒業後に教員として就職したいと思いますか」の集計結果)

	1.とてもそう思う	2.ややそう思う	3.どちらでもない	4.あまりそう思わない	5.全くそう思わない
A N=77	17 22.1%	22 28.6%	9 11.7%	17 22.1%	12 15.6%
B N=24	18 75.0%	3 12.5%	1 4.2%	1 4.2%	1 4.2%
C N=71	27 38.0%	21 29.6%	8 11.3%	11 15.5%	4 5.6%
合計 N=172	62 36.0%	46 26.7%	18 10.5%	29 16.9%	17 9.9%

表4 スクールデー実践A・B・Cの事後調査における学生が教員就職で希望する学校種
 (「教員として就職する場合、どの学校種を考えていますか」の集計結果)

	1.小学校	2.中学校	3.高校	4.特別支援学校	5.その他	6.教員志望ではない
A N=77	30 39.0%	12 12.2%	17 17.3%	3 3.1%	2 2.0%	13 16.9%
B N=24	8 33.3%	9 37.5%	6 25.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 4.2%
C N=71	21 29.6%	24 33.8%	14 19.7%	2 2.8%	2 2.8%	8 11.3%
合計 N=172	59 34.3%	45 26.2%	37 21.5%	5 2.9%	4 2.3%	22 12.8%

※ 「5.その他」の内容は、「まだ決めかねている」「小学校もしくは高校」「小学校か院内学級」等。

3.2.3. スクールデー実践の評価

「スクールデー実践の評価」に関する9項目の集計結果を表5～13に示す。なお、本節以降で扱う17項目については、順序をランダム化して配置し、黙従傾向を抑制するようにした。また、今回のオンライン実施の影響を確認するために、A、B、C間での比較と共に、前年度（2019年度）との比較を行った。

表5によると、スクールデー実践の活動が充実していたかについてBでは「1.とてもそう思う」と回答している学生が最も多く70.8%であるが、Aでは45.5%と「2.ややそう思う」とほぼ同じ割合であり、Cでは35.2%と「2.ややそう思う」よりも9.9%少ない。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、Aは88.4%、Bは100%、Cは80.3%と8割以上の学生が肯定的な回答をしていた。2019年度からの変化をみると、肯定的に捉えた学生が、Aでは88.8%→88.4%、Bでは94.1%→100%、Cでは94.6%→80.3%と変化しており、Cのみが前年度よりも14.3%減少していた。

表6は、スクールデー実践の経験を教育実習に結び付けられるかどうかについての結果を示している。表5の結果よりも「1.とてもそう思う」と回答する学生の割合が減少している。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、Aは83.1%、Bは83.3%、Cは80.3%とどの科目もほぼ同じ割合で約8割の学生は、教育実習に結びつけることができると感じていた。この数値の2019年度からの変化をしてみると、Aでは83.6%→83.1%、Bでは100%→83.3%、Cでは96.5%→80.3%と、BとCにおいて前年度よりも約17%減少していた。学校現場での活動が実施できなかった影響が表れているものと考えられた。

表7は、活動の目標を理解していたかどうかについて、「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、Aは84.5%、Bは91.7%、Cは67.6%とCの割合が低かった。2019年度からの変化を確認すると、Aでは81.6%→84.5%、Bでは100%→91.7%、Cでは84.9%→67.6%と、Aは少し増加していたが、Bでは8.3%、Cでは17.3%減少していた。

表8は、1年次の「教育実地研究」での学びを進展させられたかどうかについて、「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算するとAは63.7%、Bは83.3%、Cは54.9%であった。2019年度からの変化を確認すると、Aでは66.3%→63.7%、Bでは82.4%→

表5 「あなたにとってスクールデー実践の活動は充実していましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A N=77	35 45.5%	33 42.9%	6 7.8%	2 2.6%	1 1.3%
B N=24	17 70.8%	7 29.2%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
C N=71	25 35.2%	32 45.1%	5 7.0%	8 11.3%	1 1.4%
合計 N=172	77 44.8%	72 41.9%	11 6.4%	10 5.8%	2 1.2%

表6 「スクールデー実践の経験を教育実習に結び付けられそうですか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A N=77	25 32.5%	39 50.6%	9 11.7%	1 1.3%	3 3.9%
B N=24	14 58.3%	6 25.0%	2 8.3%	2 8.3%	0 0.0%
C N=71	23 32.4%	34 47.9%	5 7.0%	9 12.7%	0 0.0%
合計 N=172	62 36.0%	79 45.9%	16 9.3%	12 7.0%	3 1.7%

表7 「あなたが選んだスクールデー実践の活動が目標としていたことを理解していましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A N=77	28 36.4%	37 48.1%	6 7.8%	6 7.8%	0 0.0%
B N=24	9 37.5%	13 54.2%	2 8.3%	0 0.0%	0 0.0%
C N=71	15 21.1%	33 46.5%	17 23.9%	5 7.0%	1 1.4%
合計 N=172	52 30.2%	83 48.3%	25 14.5%	11 6.4%	1 0.6%

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2020年度学生の事後調査結果報告

83.3%、Cでは75.9%→54.9%となっていた。AとBは前年度とほとんど変わらなかったが、Cは、前年度よりも21.0%減少していることがわかる。

表9は、理解が滞ることがなかったかどうかについて、「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、69.1%～79.3%と活動による差は小さく、7～8割の学生が、理解が滞ることなく活動ができていたことが確認された。また、2019年度(58.8%～67.9%)よりもその割合が増えていることが確認できた。

これらの結果から、8割以上の学生が充実した取り組みができ、教育実習に結び付けられると感じ、目標を理解して活動していたことが確認された。また、半数以上の学生が1年次の学びを進展させることができ、7割～8割の学生が活動過程において理解が滞ることがなかったことが確認され、2020年度は遠隔での実施であったが、全体としてはこれまでと同様に順調に実施できていると感じられた。

そこで、A・B・Cを比較すると、Bについては、肯定的な回答をしている学生の割合が5項目中4項目で最も高かった。Cの学生は、全項目で肯定的な回答をしている学生の割合が最も低くなっていた。

2019年度の結果と比較すると、変化が比較的大きかったのはBとCである。Bでは、教育実習に結び付けられると感じた学生の割合と目標を理解して活動をしていた学生の割合が、16.7%と8.3%減少していた。Cでは、充実した取り組みができた学生の割合が14.3%減少し、教育実習に結び付けられると感じた学生は16.2%減少し、1年次の学びを進展させることができた学生の割合が21.0%減少していた。今年度、全ての活動が遠隔での実施となり、Aでは活動中の学生同士の学び合いも通常よりも難しく、BとCは学校現場での活動ができなかったことの影響が大きかったことがこの結果からも確認された。Bの方がCよりもその影響が小さかったのは、遠隔でもこれまで通りSVからの指導を受けることができたためであろうと考えられる。

表10及び表11は、スクールデー実践A・B・Cの前年度の説明会や第1回授業のオリエンテーションについて、分かりやすかったかどうかの集計結果である。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、前年度に行われる説明会は58.3%～64.7%、初回のオリエンテーションは78.9%～87.5%となり、いずれも2019年度よりも割合は高くなっていた。

表8 「教育実地研究(1年秋学期)で得た課題意識(出来なかったことを補いたい、見つかったやりたいことをもっとやりたい、分からなかったことを知りたい)について、スクールデー実践の活動で取り組むことができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	12	37	14	13	1
N=77	15.6%	48.1%	18.2%	16.9%	1.3%
B	11	9	2	2	0
N=24	45.8%	37.5%	8.3%	8.3%	0.0%
C	10	29	5	19	8
N=71	14.1%	40.8%	7.0%	26.8%	11.3%
合計	33	75	21	34	9
N=172	19.2%	43.6%	12.2%	19.8%	5.2%

表9 「あなたが選んだスクールデー実践の過程においての理解が滞ることはなかったですか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	29	32	6	10	0
N=77	37.7%	41.6%	7.8%	13.0%	0.0%
B	8	11	3	2	0
N=24	33.3%	45.8%	12.5%	8.3%	0.0%
C	18	31	13	9	0
N=71	25.4%	43.7%	18.3%	12.7%	0.0%
合計	55	74	22	21	0
N=172	32.0%	43.0%	12.8%	12.2%	0.0%

表10 「A～C選択前の前年度10月にあった説明会について分かりやすかったですか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	15	31	21	8	2
N=77	19.5%	40.3%	27.3%	10.4%	2.6%
B	2	12	4	6	0
N=24	8.3%	50.0%	16.7%	25.0%	0.0%
C	5	41	12	10	3
N=71	7.0%	57.7%	16.9%	14.1%	4.2%
合計	22	84	37	24	5
N=172	12.8%	48.8%	21.5%	14.0%	2.9%

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2020年度学生の事後調査結果報告

表12は、スクールデー実践の活動に対する学生の疲労感についての集計結果である。Aでは「4.あまりそう思わない」と回答した学生が最も多く、BやCでは、「2.ややそう思う」と回答した学生がもっと多かった。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算して、2019年度からの変化を見てみると、Aは39.8%→31.2%、Bは70.6%→54.2%、Cは71.4%→54.9%となり、いずれも疲労感を感じる学生の割合は減少しており、BとCが前年度よりも約17%減少していた。

表13は、スクールデー実践を通して教師になりたい気持ちが増したかどうかについての集計結果である。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算すると、Aは40.3%、Bは83.3%、Cは46.5%とBの学生の割合が最も高かった。2019年度からの変化については、Aは33.6%→40.3%、Bは82.4%→83.3%、Cは51.8%→46.5%となっており、Aが前年度よりも増え、Cが少し減少していたが顕著な変化ではなかった。

3.2.4. 教師に求められる資質

表14～19は、教師に求められる資質に関する項目の集計結果を示している。「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算してみると、「組織の方針やきまりを理解し、その一員として活動できたか」（表14）については61.1～69.0%と、前年度の83.6%～88.2%に比べるといずれも約20%減少、「教職員等に挨拶できたか」（表15）については、19.5%～31.0%と、前年度の74.5%～100%から大幅に減少していた。さらに「改善点を自覚しどうすれば良くなるか考えたか」（表17）については、69.0%～83.3%と、前年度と比較するとA、B、Cで11.7%、4.9%、21.2%減少しており、特にCの減少が大きかった。「時間やものを活用する力は身についたか」（表19）については、62.0%～66.7%と活動による違いは小さかったが、前年度と比較するとA、B、Cで18.2%、27.4%、5.0%減少し、AとBの減少が約2割以上と顕著であった。

一方、「先生や友人からのアドバイスに耳を傾けられたか」（表16）については、84.5%～95.8%とほとんどの学生が肯定的な回答をしており、前年度（86.7%～100%）とほぼ同様の結果が得られた。また、「学び続ける姿勢を身に付けられたか」（表18）についても77.5～100%で約8割以上が肯定的な回答をしていたが、前年と比較すると、A及びBは、それぞれ7.2%、5.9%増加、一方、Cでは10.9%減少していた。

表11 「あなたが選択した活動の第1回目授業のオリエンテーションは分かりやすかったですか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	38	29	9	1	0
N=77	49.4%	37.7%	11.7%	1.3%	0.0%
B	8	13	3	0	0
N=24	33.3%	54.2%	12.5%	0.0%	0.0%
C	12	44	11	4	0
N=71	16.9%	62.0%	15.5%	5.6%	0.0%
合計	58	86	23	5	0
N=172	33.7%	50.0%	13.4%	2.9%	0.0%

表12 「あなたにとってスクールデー実践の活動は疲労感の残るものでしたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	4	20	14	31	8
N=77	5.2%	26.0%	18.2%	40.3%	10.4%
B	3	10	5	5	1
N=24	12.5%	41.7%	20.8%	20.8%	4.2%
C	10	29	15	17	0
N=71	14.1%	40.8%	21.1%	23.9%	0.0%
合計	17	59	34	53	9
N=172	9.9%	34.3%	19.8%	30.8%	5.2%

表13 「スクールデー実践を通じて、教師になりたい気持ちは増えましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	7	24	20	16	10
N=77	9.1%	31.2%	26.0%	20.8%	13.0%
B	9	11	2	1	1
N=24	37.5%	45.8%	8.3%	4.2%	4.2%
C	13	20	27	8	3
N=71	18.3%	28.2%	38.0%	11.3%	4.2%
合計	29	55	49	25	14
N=172	16.9%	32.0%	28.5%	14.5%	8.1%

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2020年度学生の事後調査結果報告

表14 「それぞれの組織の方針やきまりを理解し、その一員として活動することはできましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	9	38	17	6	7
N=77	11.7%	49.4%	22.1%	7.8%	9.1%
B	3	13	7	0	1
N=24	12.5%	54.2%	29.2%	0.0%	4.2%
C	8	41	17	3	2
N=71	11.3%	57.7%	23.9%	4.2%	2.8%
合計	20	92	41	9	10
N=172	11.6%	53.5%	23.8%	5.2%	5.8%

表15 「教職員、保護者や地域の方々に挨拶ができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	5	10	40	7	15
N=77	6.5%	13.0%	51.9%	9.1%	19.5%
B	1	5	15	1	2
N=24	4.2%	20.8%	62.5%	4.2%	8.3%
C	2	20	33	5	11
N=71	2.8%	28.2%	46.5%	7.0%	15.5%
合計	8	35	88	13	28
N=172	4.7%	20.3%	51.2%	7.6%	16.3%

表16 「先生(教員、SV など)や友人からのアドバイスに耳を傾け、自らを改善しようと思いましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	31	34	9	3	0
N=77	40.3%	44.2%	11.7%	3.9%	0.0%
B	15	8	1	0	0
N=24	62.5%	33.3%	4.2%	0.0%	0.0%
C	29	34	6	2	0
N=71	40.8%	47.9%	8.5%	2.8%	0.0%
合計	75	76	16	5	0
N=172	43.6%	44.2%	9.3%	2.9%	0.0%

表17 「各回の活動後、自らが改善点を自覚し、どうすれば良くなるかを考えることができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	14	43	12	5	3
N=77	18.2%	55.8%	15.6%	6.5%	3.9%
B	3	17	3	1	0
N=24	12.5%	70.8%	12.5%	4.2%	0.0%
C	13	36	16	6	0
N=71	18.3%	50.7%	22.5%	8.5%	0.0%
合計	30	96	31	12	3
N=172	17.4%	55.8%	18.0%	7.0%	1.7%

表18 「常に向上しようという前向きな気持ちで、学び続ける姿勢を身に付けられましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	19	47	6	3	2
N=77	24.7%	61.0%	7.8%	3.9%	2.6%
B	15	9	0	0	0
N=24	62.5%	37.5%	0.0%	0.0%	0.0%
C	24	31	10	6	0
N=71	33.8%	43.7%	14.1%	8.5%	0.0%
合計	58	87	16	9	2
N=172	33.7%	50.6%	9.3%	5.2%	1.2%

表19 「時間やものなどを効果的に活用する力は身につきましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	13	35	13	10	6
N=77	16.9%	45.5%	16.9%	13.0%	7.8%
B	1	15	5	2	1
N=24	4.2%	62.5%	20.8%	8.3%	4.2%
C	9	35	16	10	1
N=71	12.7%	49.3%	22.5%	14.1%	1.4%
合計	23	85	34	22	8
N=172	13.4%	49.4%	19.8%	12.8%	4.7%

学校インターンシップ科目「スクールデー実践A・B・C」における2020年度学生の事後調査結果報告

以上のことから、オンラインでの実施になり、教師に求められる資質として設定した6項目のうち、4項目は前年度と比較していずれの科目においても減少しており、3年次の教育実習への課題と考えられた。しかし、2項目については、オンラインでの活動でもその方法を工夫したことによって一定の効果を上げることができたことは、今後の活動の参考になると考えられた。

3.2.5. 子どもへの指導

表20及び表21は「子どもへの指導」に関する項目の集計結果を示している。これまでと同様に「1.とてもそう思う」と「2.ややそう思う」の回答数を合算してみると、「教職への情熱、児童生徒への愛情を持てたか」については、Aは29.9%、Bは45.8%、Cは43.6%であり、前年度59.2%であったAでは29.3%減少し、前年度ほとんどの学生が肯定的な回答をしていたB

(94.1%)及びC(90.2%)ではその半分に減少していた。「声の大きさ、板書など基本的な指導技術を知れたか」については、Aは35.1%、Bは66.6%、Cは63.4%であり、前年度55.1%であったAでは20.0%の減少、B及びCについては、それぞれ前年度94.1%から27.5%、74.1%から10.7%減少していた。

これまでの調査では、スクールデー実践BやCにおいては「子どもへの指導」に関する学びがAよりもよく行われていることが確認されていたが、学校現場での活動ができなかったことでそれが減少していることが確認された。しかし、BとCについては、授業動画を視聴し班で意見を交換してSVからの指導を受ける形をとることができたことが、基本的な指導技術に関しての学びをある程度は確保できたのではないかと考えられた。

4. おわりに

横浜国立大学教育学部「スクールデー実践A・B・C」の授業は教職カリキュラム上でより高い教師力を育成するべく2018年度から実施されている。これまで学校現場実習として一定の成果を上げてきた。

本稿では2020年度の事後調査結果を報告したが、新型コロナウイルスの影響で、これまでとは異なり、遠隔での受講となり、学校現場で直接子供たちに触れ、現場で様々なことを学ぶことはできなかった。そのことで、

「教師に求められる資質」や「子どもへの指導」に関する学びのうちいくつかの項目で、前年度よりも成果が十分に上がっていない部分があることが確認されると共に

表20 「教職を目指す情熱を持ち、児童生徒に愛情をもって接することができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	11	12	42	5	7
N=77	14.3%	15.6%	54.5%	6.5%	9.1%
B	5	6	10	1	2
N=24	20.8%	25.0%	41.7%	4.2%	8.3%
C	15	16	30	5	5
N=71	21.1%	22.5%	42.3%	7.0%	7.0%
合計	31	34	82	11	14
N=172	18.0%	19.8%	47.7%	6.4%	8.1%

表21 「声の大きさ、立ち位置、板書や発問の仕方等の基本的な指導技術を知ることができましたか」の集計結果

	1.とても そう思う	2.ややそ う思う	3.どちら でもない	4.あまり そう思わ ない	5.全くそ う思わな い
A	10	17	24	12	14
N=77	13.0%	22.1%	31.2%	15.6%	18.2%
B	5	11	3	4	1
N=24	20.8%	45.8%	12.5%	16.7%	4.2%
C	12	33	10	10	6
N=71	16.9%	46.5%	14.1%	14.1%	8.5%
合計	27	61	37	26	21
N=172	15.7%	35.5%	21.5%	15.1%	12.2%

遠隔であっても内容を工夫することで確保できる学びもあるということが確認された。

2年次のスクールデー実践は、3年次の教育実習の前段として位置づけられていることも考慮すると、これまでとは異なる形での実施となった2020年度の学生については、今後の動向を確認し、教員を志望する学生については適切な支援を検討することが必要かもしれない。また、今後も学校現場での活動が制限される場合も出てくる可能性があり、2020年度の活動の記録を残し、スクールデー実践と教育実習との接続性について検証していく必要があると考えられた。

参考文献

鬼藤明仁・高芝麻子(2021)、教育デザイン研究、第12巻、pp.104-113